

ジェンダー統計の主流化をめざす動き

目黒 依子（上智大学名誉教授，前国連婦人の地位委員会日本代表）

一般に，統計は私たちが日常生活のリアリティーについて認識するための量的データを提供する。その統計にジェンダー視点が欠如していることの問題性が国際社会で明確に提起されてから，少なくとも 15 年が経過した。私たちの日常生活のリアリティー認識にバイアスが掛かっていたことを，それまでは無視していた，あるいは気付いていなかったことになる。そして，現在でもその問題に正面から対応しているとはいえない状況がある。

性別という分類上のカテゴリーは基本であるが，国際機関・先進国の途上国援助政策の見直しや，国際社会のジェンダー平等促進の動きに連動して，グローバル問題の解決という政策目標達成に不可欠の実態把握がさらに注目されるようになり，さまざまな測定や指標が開発されてきた。国連開発計画（UNDP）は，1990 年より，経済中心から人間中心とする開発概念を軸とするテーマ別『人間開発報告書』において，最初に開発した人間開発指数（HDI）以来，ジェンダー開発指数（GDI）やジェンダー・エンパワーメント測定／指数（GEM）などの複合指数を用いて各国の状況について記述・分析報告を続けている。2010 年 11 月には，GEM に替わるジェンダー不平等指数（GII）を発表した。この変更の理由は，GEM には管理職・専門・技術職の割合や所得など，高等教育や雇用機会を前提とする女性の地位や所得達成などの変数が含まれていたために，国の経済開発度に影響されやすいことや女性の達成度を測る傾向をもつというものである。新しい GI Ⅱは男女間の格差を測るために，保健分野や労働力率，中等以上の教育といった国際的に広範に共有される変数が用いられているが，女性国会議員の割合は GEM 同様に含まれる。GI Ⅱ開発以前から，経済開発度に影響されない男女間格差を測る指数としてはダボス会議を主催する世界経済フォーラムの

ジェンダー・ギャップ指数（GGI）がある（*The Global Gender Gap Report*）。GGI では経済，教育，保健，政治分野の変数が用いられているが，管理職割合や所得，関係などの男女比など，財と意思決定に関する地位達成度も含まれ，総合的にジェンダー・ギャップを測る指標としては GEM や GI Ⅱより有効性が高いと思われる。

このような複合指数の基礎となるのがジェンダー統計である。1995 年の第 3 回国連世界女性会議で採択された文書「北京宣言・行動綱領」では，ジェンダー平等促進のための 12 の重大領域を取り上げ，各領域における統計資料の不備を指摘し，政策目標達成に向けてのジェンダー統計の重要性を世界に発信した。女性たちの日常生活が統計的に表示されることにより可視化されるのであり，それは，性差の所在の認知とその背景にある問題への視線が広がる原点となるからである。「北京」後の 15 年のジェンダー問題は，経済危機や武力紛争などのマクロ・イシューと直結する性格を強め，貧困や経済，労働，暴力，保健，教育など，どの分野においても社会的に不公正なジェンダー格差は根強い。その実態と問題状況を明らかにし，研究や政策に反映されるようなジェンダー統計の整備が重要である。とくに日本では急務である（最近の日本の統計学や統計行政におけるジェンダー統計については，法政大学日本統計研究所『研究所報』No. 38（ジェンダー統計Ⅱ），2009 年；国立女性教育会館『NWEC 男女共同参画統計ニュースレター』No. 4，2010 年が参考になる）。

「常識」による推論

——シカゴ学派は古いのか——

宝 月 誠（立命館大学教授）

シカゴ学派の伝統を継承する作品に『白衣の若者たち』（*Boys in White*, 1961）という著書がある。ベッカーやヒューズ、ギアー、ストラウスらがカンサス大学医学校のフィールドワークに基づいて、医学生がどのように育っていくのかについて医学教育の世界、とくに医学生たちの間に生まれてくる集団のパースペクティブ（行為や思考のモデル）の内容を描いた作品である。比較的地味な研究であるが、そのなかでよく引用される個所がある。それは15章「医学生と患者」のなかに出てくる *crock* という言葉である。臨床実習に励む医学生は、この言葉をさまざまな患者を類別する言葉の1つとして用いている。医学生たちが用いるその言葉は「真の患者でない人」「医学的に興味のない患者」「わずらわしい患者」などを意味しているが、多分に侮蔑的なニュアンスが込められており、医学生たちは *crock* をできるだけ回避しようとする。

医学生たちが何気なく仲間同士で話している *crock* という言葉を普通ならば聞き逃してしまうところ、目ざとくそれに注目したことは、ベッカーらのフィールドワーカーとしての技量を示すものであるが、それにとどまらずその言葉が臨床場でなぜ特別な意味を有するのかについても探究する。医学生がこうした患者を嫌うのは、彼らのおかれているハードな医学教育の状況に関係している。医学生たちは限られた時間のなかで書籍では学ぶことのできない臨床経験を1つでも多く積もうとする。医学生にとっては、特段医学的に重大な問題のない *crock* は臨床経験の対象として価値はないだけでなく、くどくどと病状を訴えるのみの *crock* は貴重な時間を浪費させる存在でしかない。しかも、*crock* は「何かをなして」劇的な医学的な回復を果たすという医療の理想とはかけ離れた患者であるので、やりがいのある仕事とはい

えない。

一見単純な言葉である *crock* の意味を解きほぐし、ベッカーらはその意味を医学生たちが直面している過重な学習・実習の状況に関係づけて説明する。ただ、医学生たちのおかれた具体的な状況をこえて、こうした説明を一般化することを避けているが、この事例の医学生たちの行為は次のような仮説で説明することができる。すなわち「限られた時間のなかで必要な経験を少しでもより多く積もうとしている者は、そうしたチャンスを与えない相手に対しては冷淡な態度や忌避的な行為をとりやすい」。この仮説はプラグマティズムのいう「常識」に基づく推論であり、特定の状況において行為者はいかなる行為をするのかを的確に説明する仮説の構成を目指している。この推論の基盤となる常識の客観性はどこにあるのかと問われれば、プラグマティストは、長い期間の経験知の蓄積にほかならない常識はそれなりに客観性を備えている、と答えるだろう。

社会学の説明の意義を常識に反する意外性のある説明を見出すことや、変数間の因果メカニズムを特定化すること、あるいは隠れた「構造」を発見することにあると考えている人は、この種のアプローチを素朴なものと思うかもしれない。シカゴ学派は問題状況に直面した人々がいかに行うのか、そうした経験の蓄積である常識のなかに、社会的世界の遂行を解き明かす鍵があると考えた。それは歴史学の「実践的推論」やヴェーバーでいう「一般経験則」による説明に近いものである。社会的世界に生きる人々の行為や経験に寄り添って研究していく「自然主義的」姿勢とそこからの仮説の推論は、高度な分析方法やマニュアル化した調査技法のテキストが氾濫する昨今、あらためて必要なことと思われる。